

氏名	呉 在雄
ヨミガナ	オ ジェウン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第694号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）動的表現による時間性に関する研究：筆者作品《In Between:見えるものと見えないものの境界》を中心に （作品）《In Between:見えるものと見えないものの境界》

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 時啓
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	林 卓行
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	鈴木 理策
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師	（美術学部）	菅沼 比呂志

（論文内容の要旨）

写真術の登場以降、写実的で客観的なイメージを作ることのできる写真は、個人だけでなく、政治、社会、文化的な面でも急速に受容されるようになった。今日のデジタル技術の発展により、表現においても様々なメディアが融合して現れている。したがって、写真メディアのパラダイムも変化を続けている。写真は撮影者と機械関係を通じて作られた機械映像だ。したがって、撮影者は映像を生成するにあたって、写真について筆者だけの定義が必要と考える。なぜなら写真は世界を鏡のように複製を通じて再現するしかないからだ。したがって、写真映像に対する解釈的理論ではなく、撮影者の立場で写真的なものを写真の体系に対する考察を通じて定義する。本論文は写真的なもの写真が本来持っている時間性に関する考察を通じて本研究の再現理論とし、作品研究を通じて実現させ、時間表現の持つ意味および可能性を提示するための研究に範囲を限定する。

写真の表現は世界（対象）-カメラ-人（撮影者、鑑賞者）の有機的關係を通じて表現される。このような写真の表現体系は、撮影のみならず写真が時間性を獲得できる根拠となり、鑑賞者が写真映像を解析（理解）することに影響が及ぶようになる。そのため、写真をリアルに見るのか、主観的な表現が可能なのか、客観的なイメージなのかという議論も、写真の関係性から始まったと言える。筆者は、写真から映像を作り、表現の材料となる光と映像を生成するカメラの光学的特徴と、撮影者によって再解釈され完成した写真映像の持つ意味を考察を通じて明確にする。写真で時間性は撮影者とカメラによって獲得される。写真の持つ本来の時間性は瞬間、記録、停止で獲得されるとみて考察する。また、写真における時間性の表現は、構造（メカニズム）的にシャッター速度を調節して映像を生成する方法と、写真映像を構成して時間性を表現する方法の2つで見られる。したがって、シャッター速度による表現の開始と時間を表現する現代作家の作品を分析し、写真集やフォト・シーケンス、フォト・コラージュ、デジタル合成に現れる時間性について事例研究を進める。

写真の表現体系と時間性に関する考察を通じて明らかになったことを筆者の作品に反映させ、時間性表現の新しい方法を提示するため、方法として動的写真を提案する。動的表現の可能性は、時間を視覚化することと写真で撮影者による写真的行為の重要性、そして写真映像の媒介的性格と定義し、筆者の作品研究である《In Between:見えるものと見えないものの境界》連作を通じて動きと停止に対する多様な再現方法を模索した。直線的な時間を表現するために線と色で表現した<Between the borders:同時の境界>、瞬間の意味と見えないものに対する表現である<Moment of persistence:持続の瞬間>、現在性を強調するための動きと停止を同時に表現した<Moment and during:瞬間と間>、光と時間を視覚化するために時間を圧縮して新しい視覚的経験を表現した<Day and Night:昼と夜> 4つの作品から構成

される。動的表現で写真映像によって直接的な意味を持たないために動きを強調することは、写真の美的価値である喚起性（オーラ）を強調することになる。

《In Between：見えるものと見えないものの境界》連作は、時間性を積極的に表現することで、デジタル環境への早い転換が行われる今、写真的なものの定義とともに、時間を視覚化することが表現の中心となる。カメラが存在する限り、世界-カメラ-撮影者に対する多様な定義を通じた写真表現研究が進められることを期待する。

#### （論文審査結果の要旨）

本論文は著者がその自作について、「動的表現による写真の時間性」を鍵概念として考察を加え、その成り立ちを明らかにするものである。

著者にとって「動的表現による写真の時間性」とは、静止画としての写真を媒体とする表現において、時間の推移を記録し、あるいは見る者に感じさせる表現のことである。このような表現が必要になる理由として、筆者はまず、撮影後の加工を自由自在に行うことができるデジタル写真の登場によって、写真はみずからを対象の客観的な像として保証することができなくなった事実が背景にあるとする。すなわち、写真は「光」と「映像を生成するカメラ」、そしてそこになんらかの「表現」が加えられて完成した映像の三要素からなる「写真的なもの（the photographic）」として把握されなおされるべきなのであり、ここでは従来のような写真の指標（index）的性質、あるいはその被写体の客観的実在を無批判のうちに基底とした表現の存立は、危ぶまれることになる。

そうした状況下にあつて、著者によれば「時間性」こそが「表現」に値する要素である。そこでそのような表現のための「動的表現」が探究される。著者によればこの表現はおもにカメラに入る光をコントロールするつぎの4つの方法によって可能になる。すなわち、(1)直線移動する視点の推移をスローシャッターで記録する方法（《Between the Borders：同時の境界》）、(2)動きそのものをスローシャッターで撮影する方法（《Moment of Persistence：持続の瞬間》）、(3)シャッタースピードを「現在を感じられる限界」とされる最大5秒間に限定しながら、動く被写体と動かないそれを同時に撮影する方法（《Moment and During：瞬間と間》）、そして(4)異なる時刻に撮影した同じ場所の静止画を同一フレーム内に二重露光する（《Day and Night》）の4方法である。こうした方法を考案するにあたって、著者は先行する写真家たちの作品とその成り立ちを精密に把握することから始め、併せて多数の思想的・科学的知見を積極的に参照する。

ここで著者が非デジタルの、いわゆるアナログ写真という限界を拡張するのではなく、むしろそれを構成するもっとも単純な機構のなかでこの表現に取り組み、またその実質を論証しようとしている点は重要である。複数枚の写真を用いた継時的な表現や、いわゆる「組写真」のような手法はしりぞけられ、あくまで一枚のイメージ内部で完結する「時間性」の「動的表現」が目指される。写真の誕生後にさらに現れた、文字通り動く「動画」、さらには画素の位置や色を自在に変えられることでもはや「絵」と区別がつかなくなったデジタル写真の技術は、写真による作品の制作者たちをして一枚のアナログ写真の撮影者であることを忌避せしめ、可能なかぎり多方面に写真を拡張するよう駆り立てたが、そのなかで一枚の銀塩＝アナログ写真による作品制作に留まり、その成果として「動的表現」を見出した点は、依然としてこの写真というメディウムの枠のうちに開拓すべき領域が残されていることを示唆している。そのような写真に残された可能性の発見という点に本論の意義を認め、それゆえ本論を博士論文として所定の基準を満たすものとする。

#### （作品審査結果の要旨）

呉在雄の連作《In Between：見えるものと見えないものの境界》は、「写真的なもの」への問いを基に、

写真についての論考や作例を参照して考察した結果、写真における「光」と「時間」に着目した自身の写真理論を表出したものであり、4つの作品から構成されている。

〈Between the borders : 同時の境界〉は時間を線と色という要素に還元して表現した作品である。時間は個人において感覚され、人の数だけ時間があるが、写真はある時点を機械的に記録するのみである。多様な時間を単視点で写し取るにあたり、ここでは動きの要素が取り入れられた。電車の窓にデジタルカメラのレンズを密着させて固定して一駅分の区間を長時間露光した本作品は、具体的な情報性は失われ、横に伸びる色の線として表れた。どこも似たような風景と思われた窓外の風景にも、地域や路線によって差があらわれている点が興味深い。

〈Moment of persistence : 持続の瞬間〉は、作者が時間を象徴する存在と考える木についての作品である。季節によって色や姿を変え、時間を視覚的に表している木、そこに吹き付ける不可視の風。両者が出会う際に生じる状況を6×6cm判フィルムで1/60秒のシャッタースピードで撮影し、敢えてブレた写真にすることで、揺れる木によって引き起こされた感情、またその感情によって木が異なるものを感じられた経験をあらわし、感覚的・視覚的な経験を写真に置き換えることの可能性と、瞬間とは何かを問うものである。

〈Moment and during : 瞬間と間〉の主題は人間にとっての時間と、カメラがあらわす時間の差異である。人間は動的な変化に反応してシャッターを押すが、カメラはただ機械的に記録する。その違いを際立たせるため、動くものと動かないものがひとつの画面に同時におさめられている。多くの人にとって馴染みのある風景が選ばれ、4×5インチフィルムを用いて被写界深度を最大限深くし、5秒の露光時間で撮影することで、静的な日常的風景の中で動きある要素が強調され、それが鑑賞者によって発見されることが意図されている。

〈Day and Night : 昼と夜〉は24時間を表現した作品である。昼間に早いシャッタースピードで一次露光を行い、その場所で日暮れを待ってから、夜間に同じフィルムで長時間露光することで、普通の撮影では得ることができない異なる時間の光が一枚の写真の中に定着されている。昼間の撮影では太陽が移動する方角が、夜間の撮影では人工的な照明が撮影地点を定めた本作品では、場所の意味は後退し、「光」の比重が増している。

呉は連作《In Between : 見えるものと見えないものの境界》において、写真における光と時間の意味を考察し、多視点的に実践している。被写体の意味の容れ物としてではなく、写真によってのみ経験されるものがあることを実践的に論証するものであり、博士号に値すると判断した。

#### (総合審査結果の要旨)

呉在雄は、写真表現を専門に行ってきた。東京工芸大学大学院から本学博士課程に進学し、アナログ写真からデジタル写真への大きなパラダイム変化により、写真というメディアの有り様が急激に変化を続けていることに重大な関心を持ち、博士課程の制作と論文執筆により自身にとっての写真表現の体系を定義付けようと試みた。

写真は、人(撮影者/鑑賞者) — カメラ(装置) — 世界 によって成り立つことを経験から学び、ロザリンド・クラウドやロラン・バルト、スーザン・ソントグの論考を読み進め、写真の映像と生成する撮影者の立場からの考察を通じて写真的なものとは何かを探る。そして自らの作品としてカメラが作り出す機械的側面を利用した時間そのものをテーマとして表現する事の研究であり、修了制作は4つの作品で構成され、撮影者の動機とカメラのメカニズムによって作られた事態が写真であることを証明する。

呉は写真の根源的な構造が光と時間であるとする。そして他の媒体と違う特徴は光学的世界が撮影者の時間とカメラの構造によって映像として生成されたものであり、それは対象に対する直接的な再現ではなく、光の現れであるとする。さらに写真は記録的な側面と表現的な側面を同時に持つことができ、他の媒体と違い撮影者の視線を反映して新しく作られた写真的リアリティであるとする。

また写真の時間性は撮影者とカメラによって獲得され、時間は、客観的な時間と主観的な経験で構成され

るとする。動的な状況を通じて時間性を表現し視覚化することにより、写真が持つ対象性を克服し対象の意味を超えることができれば、鑑賞者の主観の介入によって喚起性を触発しうるとする。そして目には見えない時間と概念を視覚化することにより、写真の美学的価値である喚起性を強調する事になり、カメラが作り出す機械的側面を利用して時間そのものを表現することの可能性への研究を進めた。

提出された修了制作作品、及び論文ともに優秀であり本学博士課程修了として相応しいレベルに達したので合格とする。